

『#NHK スペシャル file.10 未解決事件 下山事件』（2023 年）を視聴した。

本作は、日本中に大きな衝撃を与えた「未解決事件」の真相を徹底検証するシリーズの第 10 弾ということだ。

1949 年 7 月、国鉄職員 10 万人の解雇に関して労組と交渉中、国鉄総裁・下山定則が突然失踪し、列車にひかれた無残な姿で見つかった事件。“占領期最大の謎”として「下山事件」と言われている。1949 年は中華人民共和国が成立した年で、共産主義が世界を席卷しようとしていた。

遺体には不自然な点が多く、警察の捜査は「自殺説（捜査一課の足取り説）」と「他殺説（捜査二課の解剖根拠説）」で見解が対立した。それぞれが独自に捜査したものの、捜査本部は解散させられて事件は迷宮入りした（ある筋から圧力がかかったためである）。その後も、松本清張や著名ジャーナリストたちが繰り返し謎に挑んだが解けないまま 75 年が過ぎた。NHK の取材班が独自に入手した第一級の資料を駆使して、実録ドラマとドキュメンタリーで迫っていく。

今回、第 1 部は「実録ドラマ」で迫ってゆく。始まりが素晴らしい。森山未来扮する東京地検の主任検事・布施健がロッキード事件の捜査全体を指揮して田中角栄を逮捕する場面からだ。布施主任検事は満足していない。暗に米国主導のやらせにさせられたのではないかと考えているからだ（これは下山事件に通底している）。この布施検事が「下山事件」を担当し、結局、未解決事件という苦い経験になっていたのだ。

捜査の過程で、様々な混乱を招く証言が現れる。ソ連のスパイを名乗る男の証言から「他殺」を強く疑うようになる。背後には超大国同士（ソ連と米国）の謀略の影があった。そして捜査を重ねれば重ねるほど、異なる証言が飛び出し、何が真実なのか見えなくなっていく。朝日新聞や読売新聞の記者、政治家佐藤栄作（何とノーベル平和賞受賞）、右翼児玉誉士夫らの関わりも出て来る。

第 2 部はドキュメンタリー・タッチとなる。ここでは、第一部で焦点がぼやけ、検察が届かなかった事件の謎に独自取材で迫る。

米国に保管されていた機密文書から、韓国人男性が米国の諜報組織の密命を受けていた可能性が明らかになる。反共秘密工作を担った“Z 機関”の元諜報員が

残した「最後の証言」も出て来る。占領期の深き闇の奥で見えてきた真相とは、米国は数か月後に起こそうとしていた「朝鮮戦争」の際に日本の国鉄による戦時輸送を下山国鉄総裁に依頼したが、下山が拒否したことで抹殺されたというのが真相のようだ。

寛容で豊かで自由の国と思込まされていた米国。しかしその米国に逆らえば抹殺されるのだ。栄華を極めた田中角栄さえも（田中角栄がロッキード事件で起訴された背景には、米国との外交的摩擦が影響したという陰謀説が複数存在する。特に日中国交正常化や資源外交が米国の不興を買ったとする説が有力である）。米国が認めないパレスチナの存在も日本は追従である。日本のため、世界のために命を懸ける政治家はいないのか。誰も命は大事だ。米国に逆らってまでして第二の下山定則や田中角栄になる勇氣はないのだろう。悲しい現実だ。

Amazon prime video や netflix に転がっている「どんでん返し映画」より、とっても興味深い。事実は小説より奇なり。

評価：★★★★★+α